

特集 子どもたちに「学校」を 学校に行けない子どもたち

桜の花びらが舞う4月、日本では子どもたちが一斉に新学期を迎える。一方、世界には、日本のようにすべての子どもが学校に行くということが難しい国も多い。そうした国々では、なぜ学校に行けない子どもたちがいるのだろうか？

世界のすべての人が持つ基本的な権利の一つである「教育」。これは、生活する上で必要となる基礎的な知識・技能を習得することであり、その主な習得の場が「学校」だ。日本では、教育の権利を保障するため、学齢の子どもにも普通教育（小学校・中学校

の9年間）を受けさせることを保護者に法律で義務付けている。しかし、世界では、小学校に行くことができない子どもが約7500万人（男子3375万人、女子4125万人）もいる。その大部分は開発途上国に集中している。初等教育の純就学率^{※1}を見ると、日本は男女とも100%だが、途上国の平均は男子87%、女子84%、サハラ砂漠以南のアフリカは男子73%、女子67%と、さらに低い^{※2}。子どもたちが学校に行けない大きな理由が貧困だ。貧しい家庭の子どもたちは、家事を手伝わなければならないかたたり、働かなければならなくて、学校に行く時間がない。また、学費が無償であっても、文房具や制服を買うことができない。多くの国で学校や先生の数が足りず、戦争で学校が閉鎖されてしまった国もある。途上国では貧困を背景に、これらの数々の事情が絡み合い、子どもたちの就学を困難にしている。こうして学校に通えない子どもたちは、読み書きや計算など基礎的な能力すら習得できない。そのため大人になっても、不安定で収入の少ない仕事にしか就けず、貧困から抜け出すことが難しい。また、病気や栄養の正しい知識が得られずに、生命にかかわる危険性も高まる。子どもたちから学校に行く機会を奪うことは、将来のさまざまな可能性の芽をも摘んでしまうことを意味するのだ。

※1 公式の就学年齢に相当する子どもであって初等学校に就学する子どもの人数を、当該年齢の子どもの人口で割ったもの。
※2 数値は、国連教育科学文化機関（UNESCO）「Education For All Global Monitoring Report 2009」から。

貧しい家庭では、子どもも重要な働き手。農業などの家の仕事を手伝ったり、外に働きに出なければならない。また、お金がなくて文房具や教科書、制服を買えないことも多い。



家計を助けなければならない

弟や妹の世話、水くみなどの家事を手伝わなければならない



途上国では、5人、10人と兄弟がいる家庭が多く、両親の代わりに、幼い弟や妹の面倒を見なければならない。また、井戸や水道が近くになくて何時間もかけて水くみをしなければならなかったり、燃料となる薪を集めたりしなければならない。



学校が近くにない

学校の数が足りない国や地域では、学校が遠すぎて通えないことがある。学校があっても、教室や勉強机が足りない場合も多い。また、雨期には、川が増水したり、舗装されていない道が崩れて、通えなくなることもある。特に女の子は、地域によっては誘拐やレイプの危険もある。

子どもたちが学校に行けない理由

学校に行けない子どもたちには、「貧困」を背景にさまざまな事情がある。また、それぞれの事情が互いに結び付き、就学をより難しくしている。

先生がいない



学校があっても、先生の数が足りないことが多い。政府に先生を雇うお金がないことが主な原因だ。アフリカでは特にHIV/エイズで亡くなる先生が多い。また、教員研修の機会がないために、授業の内容や教え方など教育の質が低いことも問題となっている。

戦争で学校がなくなつた



戦争で学校が壊されたり閉鎖されてしまったり、先生が兵隊に取られたり、子どもが兵士にされることもある。また、戦争が終わっても、国にお金や人手がなくてなかなか学校を再開できない。

両親が行かせてくれない



保護者自身も教育を受けておらず、教育の重要性への理解が十分ではないために、学校に通わせるよりも働かせたほうが良いと考えたり、特に女の子には教育は必要ないと考える保護者が多い。また、宗教・文化的背景や地域の慣習が女子の就学を難しくさせている場合もある。

面倒を見てくれる大人がいない



病気や家庭の事情で両親や家族を失い、面倒を見てくれる大人がいないために、路上で生活せざるを得ない子どももいる。特にアフリカではHIV/エイズで両親を亡くした孤児が増えている。